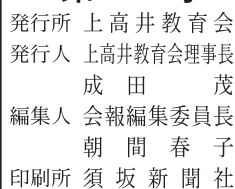


同好会副会長 片桐 秀一

「出席率も高く二日間充実した研修ができた」「時間がたっぷりありとても好評であった」「会員以外の参加が半数で反響が多かった」との感想がある反面、「各校で必要とされているであろう内容であったが、参加文学・郷土地理・書道などは現在も引き継がれているが、聖書同好会・歎異抄同好会・作文同好会などの無くなったものもある。当時僅かな補助金でありながら、中央の当代一流の学者を講師として頻繁に招いたり、自費くもないが、今も土曜日に定期的に講師をお招きして研修会が開かれているのをみると、上高井教育会に「教師の自己研鑽」の精神が脈々と受け継がれていることをうれしく思う。

（栗方丘小）



墨坂中学校

また、この活動の締めくくりとして、できあがった壁画を県立須坂病院に飾ってもらえるようになったため、生徒は墨坂祭での成就感を得るだけでなく、患者さんや病院関係者に対する気持ちを一枚一枚のチラシに書き込み、鶴に折り込むようになった。

七月上旬から九月中旬
年に二回行われる資源回収
で折り込みチラシの収集。

●裁断・色合わせ



発送式での生徒会本部役員

七月下旬より（会誌編集委員、本部会役員）

●折り鶴製作作業

一人三六羽、合計約二万羽を作成。白い鶴には患者さんへのメッセー지를記入。

(全校)

●折り鶴お披露目
文化祭開催式にて盛大に行った。全校生徒・保護者から驚嘆の声と暖かい拍手を頂くことができた。

● 発
送
式

体育館にて發送式を行い、後日、須坂病院の都合の良い日に会誌編集委員と生徒会三役が同行し、寄贈式を行う。
(小林 巧)

上高井教育会会報
碩突委員長會
第201号発行

信教全県研究大会を終えて

日滝小学校

していききました。

授業研究会では、「課題設定、共同追究の参考になった。」

研究大会が本校を会場に行われました。この日を迎えるにあたって、「研究のための研究にせず、毎日の授業に生じる研究を進める」ことを念頭に研究を進めてきました。

また、指導者の先生からは「子どもたちの力の高まり」

「子どもたちの力の高まり」考え方における意識の連続性」

「わかるということの意味」などの具体的な指導を頂くことができました。

見通しがもてないと消極的になってしまふこともあり

体育科では、四年生のマツト運動「チームマツトで金メダル」という単元を見ていた

学校教育目標「いきいきとみんなが励む 明るい学校」の具現に向け、「課題を持って追究し、『分かった』『できた』喜びを味わえる授業の創造」を全校研究テーマに設定し取り組みました。

当日は、「算数科」と「体育科」で公開授業を行い、参会の先生方から貴重なご意見を頂くことができました。

算数科では、三年生の「みんなで考えよう かけ算の筆算」の単元を見ていただき

ました。繰り上がりのある(二位数)×(一位数)の筆算で、部分積を挿絵や数え棒などをもとに自分の考えを明確にし、共同追究場面を設定することによって、互いの考えがつかあったり重なりあったり

などたくさんのご意見をいただきました。

指導者の先生からは「願いと見通しについて」「スモールステップの有効性」「グループピングや人数構成の工夫」などわかりやすく指導して頂きました。

私は、体育科の研究グループで、マツト運動の集団演技という授業に初めて取り組みまして、子どもたちの関わりを大切にしながら楽しんでほしいと願って授業を考えました。初めての取り組みだけに、子どもたちも演技の構成を考えるのに時間がかかり、新しい技に挑戦し技能を高めていく時間が短くなってしまったなど、たくさんの方の反省・課題も残りました。

今回頂いた貴重なご意見や指導をもとに、更に研究を深め、毎日の授業の改善に励んでいきたいと思っています。

(田村 中)



栗ガ丘小 森山裕士

信教全県研究大会

「自己を表現していく力を高めていく授業」をめざして

高山中学校

姿へと変化していくのではないかと考えたのです。

授業は、次の内容で進められ、公開されました。

そこには、「自ら表現していく」ということを、「具体的な経験や実感を通して得た自分の思いや考えをまとめ、相手にしっかりと伝える」ことから、「まわりと関わりながら、さらに自らの追究を深めていく」ことにつながりたいという願いがあります。

その支えとなるものは何かを考えた時、「自らを語れる」「相手の話が聴ける」為の授業づくりが不可欠と考え、授業づくりの条件として次の三つを考えました。

(1)教科、特別活動、行事等を相互に関連させた学年カリキュラムづくりを通して、日々の学校生活に即した、実感できる授業展開や授業内容

(2)学習の場や教材を地域や身近なものに求めることにより、実際のものに触れ、経験を通し、本音・本心が語れるような授業の創造

(3)教科の特性を考えた表現の方法を学び、表現が単方向で終わることなく、双方向の活動へと深まる授業の工夫

このような手だてを講ずることにより、個人の学習課題が明確になり、課題追究の意欲や、自己を表現していく必要性が高まり、更に「相互の関わり」の中で課題を共有し、相互に追究し、高め合う

当日は、生徒の学びの姿で先生方に教えていただきました。「表現していく力は何か」を更に明確にしていこうという課題が残りました。詳しくは、会誌六十一号をお読みください。

(山崎 茂)

楽しい英語活動を

森上小学校

ジョイセフとの出会い

ジョイセフ教育を縁に

東中学校

社会のグローバル化が進む中、本校でも、英語によるコミュニケーション能力の基礎を身に付けていくことは、子どもたちの将来にとって大きな意味があると考え、学校全体で英語活動を取り入れていきます。本校では、英語活動をする中で、

○「英語は、楽しい」と感じ、積極的に英語に関わろうとする子ども

○恥ずかしがったり、間違いを恐れたりせず、進んでコミュニケーションをはかろうとする子ども

○外国の生活や文化に興味関心をもち、日本との共通点や相違点を見つけながら、自・他国の文化それぞれを大切にする心を養い、共に生きようとする国際感覚をもつ子どもを目指しています。本年度は、三年生から六年生は二〇時間、一・二年生は一〇時間を目標に取り組んでいます。授業では、音声を中心とし、子どもたちがしたいこと、知りたいことを題材に、体を動かしながら五感に訴えることを基本としています。

また、一時間での評価を急がず、同じ表現を繰り返し扱い、英語のリズムの中に子どもたちを浸らせるということも大事に考えています。ALTの



6年生の授業

先生にも来ていただき、子どもたちが世界の文化と出合う発信源として、お力を貸していただいています。先日は、六年生の授業で、ALTの先生の故郷のカナダを思い浮かべて絵を描くゲームをしたり、カナダにはなぜ給食がないのか、カナダが多民族からなる国家であることなどに触れて話をしていただいたりしました。

英語活動を始めたことにより、ALTの先生を身近に感じ、知っている限りの英語とジェスチャーを使って、うれしそうに話し掛ける子が増えています。また、手探りの状態ですが、楽しい英語活動をつくっていききたいと思っています。

(武居敦子)

財団法人家族計画国際協力団体(ジョイセフ)は発足三十九年余りにわたり、延べ二十七八カ国の海外発展途上国で世界の人口問題、家族計画、母子保健、環境衛生などの分野に取り組んでいる民間組織です。現在世界では、思春期における性教育が重視され始めてきているそうですが、本年度ジョイセフが主催するリプロダクティブヘルス(性と生殖の健康)指導者研修のため、各国の指導者の皆さんが須坂市の保健関連施設や病院などを訪問されました。そして去る九月十四日、縁あって一昨年度よりエイズ教育についての研究を進めている本校にもスリランカ、グアテマラ、ホンジュラス、マリ、ミャンマー、フィリピンなどから十三名の方々が来校されました。

当日は、まず係職員から本校の研究内容と学校の現状を説明、担任と養護教諭で行う健康教育に関する授業を参観していただきました。その後保健室で養護教諭との懇談会が持たれ、各国の指導者の皆さん方は、自国での現状を踏まえながら、特に性教育の分野で熱心に養護教諭に質問などをして研修を深めておられました。

(島崎英子)

本校の宝④ 伝統が支える読書活動

豊洲小学校

四月に赴任して学級を回ってみると児童の中に本を読むという雰囲気が出ています。この伝統を大切に育てていきたいと感じている。学校が洪水にあった時にまず、地域の方から本が寄贈されたという話を聞いた。こうした地域全体で豊洲の子どもたちを育てていくという伝統が昔から脈々と現在まで続いている重みを感じている。

平成元年の百周年記念の時に多額の図書購入補助をいただいたと記念誌に書かれている。また、いつ始まったか定かではないが、地域に豊富にあるよもぎを登校班ごとにまとまって採取して業者に販売し、その代金で図書を購入する活動が行われてきた。今年度も五月に実施され、その収益金で購入された本は「よもぎ文庫」と名づけられた図書館の一角に納められ、多くの子どもたちに利用されている。

図書館の片隅に星野富弘さんの絵葉書を入れた素晴らしい額が寂しく掛けられていたので、図書館前にコーナーを設けた。本年度新たに二冊買ってもらった。

十一月の校長講話では、人権同和教育月間ということに踏まえて、星野富弘さんの本を借りる児童ができたことは嬉しいことである。他にもテーマを持ってコーナーを随時設定して色々な本に親しめるように図書館も工夫していきたい。

(白井光裕)

火ばら 談義



栗ガ丘小 森山裕士

続「ユヤ」と私

綿内剛美

「ユヤ」との二人暮らしが続いている。変わったことと言えば、朝起きてくれる時刻が六時半頃になったことぐらいか。そう、もう一つあった。彼女は十月に九才になった。人間で言うと六十代、つまり私の姉さん女房になったのだ。そのせいか手を抜くことが目立つ。朝の見送りはコタツの上ですませ、帰宅の出迎えは玄関内という始末。呼んでも返事すらないことだってある。そのくせ要求することは抜け目ない。目が合うたびに「飯だ」「水だ」「抱っこだ」とスリスリしてくる。最近では出迎えもほろほろに、玄関先で仰向けになって身体をクネクネさせるのだ。愛情欲求の表現だが、その姿が実に可愛いのはネコ女房だからこそだ。これがボンマの女房だったら？と頭をかすめただけで「めまいがして卒倒してしまうのである。しかしまあ、どんなに身勝手でも、お腹を見せるということは信頼の証であるし、夫婦以上の仲でもあるので、それに応えネコジャラシで三十分程遊んでやるのが常なのだ。

私も定年を一年後に控え、後のことを考えなければいけない時期になった。そこでユヤに芸を教えテレビに出演させることを思いついた。彼女をよく観察していると、家じゅうの引き戸は全て開けることができるが決して閉めることはしない。戸を閉める猫！これは絶対にいける、その日から訓練を始めた。戸を開けるのを待つて捕まえ、手をとって閉めさせる。そしてすぐ大好物の鮭の切り身を与える。嫌がつて指をガブリとやられたこともあったが、生活がかかってくることで必死に続けた。つい先日、ユヤが茶の間の障子を開け、向きを変え、棧に手をかけたのが目に入った。「やったー」。喜びで万歳を叫ぶようになったとたん、ユヤは私を見て「ニャー」と鳴き、「ニタリ」と笑い（そう見えた）踵を返して表へ行ってしまった。あの鳴き声と笑いは何だったのだ。

「おーい、お茶」「ニャーゴ」。「ユヤ」と私、二人だけの平穩無事な生活はまだまた続くのである。

(森上小)

子どもと本との 出会いを願って

伊藤ふき代

毎朝職員室から教室に行く途中、図書館に通うクラスの子どもたちと会う。今、子どもたちの読書離れの傾向が言われているが、二年生の子どもたちには当てはまらないようだ。

学級では、時々本のブームが起こる。「かいけつゾロリ」シリーズや「ピーターラビットの絵本」など。仲間が関心を持っている本は、

「学級だよりをカラー 写真入りで作ろう」

古平靖彦

学級の様子を保護者の方々に伝える学級だよりを、より見やすく、その時の雰囲気や伝わるようにするにはどうしたらいいでしょうか。私の拙い実践を紹介します。

一、写真入りの学級だより！

クラスや子どもたちの様子を伝えるのに、写真を学級だよりに掲載するのは、とても有効だと思います。

以前は、カメラで撮った写真をプリントしてもらって、スクリーナーを使って…、という面倒な方法でしたが、デジタルカメラが普及した今、写真をお便りに載せるのは、とても楽になりました。

やはり読みたいようである。そんな少しのきっかけで本を読む子どもたちなので、子どもたちと本との出会いをもっと広げてあげたいと願い、ブックトークを試み始めている。

ブックトークとは、「一つのテーマを設定し、それに沿って優れた図書群を順序良く紹介する」ことである。季節や行事、聞き手の興味・

二、カラー写真がたくさん載った学級だより！

せっかくの写真もリソグラフ等の白黒で写真製版して印刷したものは、カラーに比べるとやはりだいぶ見劣りしてしまいます。そこで、思い切ってパソコンのカラープリンターでクラス29人分を印刷することにしました。

やはりカラー写真入りだと保護者の評判もよりらしく、中には、「カラーの時のお便りはとってあるけど…」なんていう声もありました。しかし、カラーでプリントアウトする大変さもあります。一つは、費用がかか

関心、今学習していることなどを考慮してテーマを決めたら、まず何はともあれ本を読まなければならぬ。忙しい中でこの作業は大変だが、いつの間にか本の世界に浸りこんで楽しんでる自分がある。クラスの子どもたちの顔を思い浮かべながら、ジャンルや内容に幅を持たせて選書する。

次は、全体を通して一つのストーリー性をもつようにつなぎを考えていく。クイズを入れたり、どの部分を読み聞かせたりしたらいいか考える。

そして、実演。騒いでいること、プリンターのインク代が結構掛かってしまいます。学年費から支出する場合は、保護者の理解を得なくてはなりません。

さらに、プリントアウトするのに、とても時間が掛かってしまうこともネックです。

カラーレーザーなら速いのですが、学校にはあるはずもなく、インクジェットでA4を30枚プリントするのに40分以上掛かってしまいます。

今年は、毎号という訳にはいかず、今のところ60数号ほどの三分の二ぐらいが、カラー版といった状況です。面倒なことではありますが、やってみると良い面がたくさん感じられると思います。一度いかがでしょうか。

(豊丘小)

編集後記

子どもたちもブックトークの世界に引き込まれているのがわかるとうれしくなる。わたしの大好きなお話「わたしの赤おに」(はまだひろすけ)は、カラーの挿絵がきれいだけれど、やや長い文章で古びた本だった。子どもたちが普段なら目に留めないそんな本もブックトークをすると手にとって読んでくれるのは、本の持ち味が伝わったからだろう。

子どもと本との豊かな出会いを生み出すために自分に何ができるか、これからも考えていきたいと思う。

(高山小)

年の瀬が近づき、今年も残すところあとわずかとなりました。オリンピックでの日本選手活躍や、イチロー選手の大記録に感動した二〇〇四年でありましたが、子どもたちをめぐっての悲しい事件も続きました。心が痛むと同時に、教育が担う役割の大切さを改めて思いました。

今回は各校の研究実践を中心に編集いたしました。お忙しい中、原稿を寄せていただいた皆様に心より感謝申し上げます。

